

---

# 行き着く果てに見えるモノ

W・SAGA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

行き着く果てに見えるモノ

### 【Nコード】

N7880Y

### 【作者名】

W・SAGA

### 【あらすじ】

『J・D』 / 与えられた名前。

未知の技術 / 死亡 / 回収 / 九鬼財閥。

脱出 / 橋天衣らと共に行動を開始する。

行き着く果てには

## プロローグ（前書き）

アニメ版と共に更新できればと思いますね。  
名前はなかなか気にしない方向。  
謎めかしくは段々とされていく方向。

## プロローグ

起動。

意識回復／現在状況　不明事項多数／現在位置　把握不能。

視界　良好／周辺観察に務める／森の中、それも奥深い／日の光の様子から日本ではなく海外であると判断。

身体負傷無し／食料がないため確保すべく行動を開始する。

行動開始後、『敵？』を発見／自分の武器を把握して先制攻撃を仕掛ける。

相手の対応は早い／敵意無し？／攻撃が停止された。

女／傭兵／名前を　後ほど確認『忍足あずみ』

『敵』ではない　『味方』を発見した。

|| || ||

どうにも変わったガキ、それが初めて会った時の　いや、発見した時の印象だった。

血みどろのゲリラ戦、情報が漏れていたためか罠を張られ、なんとか生き抜いて身長に合流地点に向かっていると、横合いからそのガキが飛ぶ出だしてきた。

反射的に武器をそちらに向け、しかし相手の姿を見て咄嗟に攻撃を抑え込んだ。

少年兵といったわけでもない、銃や何かの武器すら持っておらず、

それでいてこんな所には似つかわしくない金髪のガキ。多くすんではいるが、その金髪はこの土地に住むゲリラにはありえない。  
話を聞いてやる暇なんてなかった。急ぎ合流地点に向かわなければならぬからだ。  
そう、暇なんてなかったはず

「おいクソガキ、なんでテメーはあんな所にいやがった。つかついでくんない」

「わからない。ここがどこなのか。自分が誰なのか。気付いたらあそこにいた」

その頃のあたいは傭兵稼業に少し嫌気が差し始めていた頃だったし、あたいは元からむやみやたらとガキまで殺す畜生野郎じゃない。それでも結局そのまま合流地点までついてこさせちまったのはやりすぎだったかもしれない。

作戦行動に支障が出た可能性だってあるってのもあるが、同僚に盛大にからかわれるハメになったからだ。

「おいおい、いつのまにガキ作ってやがったんだあずみ」

「テメーがママかよ。笑えねえ冗談だぜ」

「てめえらぶつ殺すぞ！」

あの時は最悪だった。その時すぐにでもガキをぶつ殺そうかとも思ったほどだ。

しかし、何故だかそのガキはあたいらの隊長である大佐と話し込んでいた。

結果だけ見ればだが……意外と大佐は子供に甘いのかもれない。

そのガキはこの戦いの後で、大佐の率いる傭兵部隊に入ることになった。

無論、一から訓練しなければならなかったし、そんなんで戦いを生き残れるはずもないのだが、それでも大佐が自分の下につけて猛特訓させているとはいえ部隊には入れたのは、一番初めの戦いに時に判明したガキの持つ能力があったからだろう。

今はともかく、昔はあれがあったからこそ生き残れていたというのは大きかったはずだ。

……まああたいにとつては、その時期は同僚に『ママ』だの『親子』だからかわれた最悪な日々だったんだが。

|| || ||

戦場／初めての時程の高揚は無い。

「無茶すんなよガキ」／了解、と頷く／同僚にとって自分はまだ未熟／忍足あずみはそれが気に食わないらしい。

重ねた年月の差には打ち勝てない／前に述べたが一度怒られた。

別に歳の事を言ったのではないのだが／心を切り替える。

戦場は膠着／指示を待つ。

現在はこちらが優勢。

壁越しに敵拠点を探る／担当ポイントの敵影は五。

正面からの攻撃が開始された／ポイントの敵が二名減少。  
指示に従い攻撃を開始する／銃は使用しない／迅速かつ確実に／冷静かつ静謐に。

右足で地を蹴る／最も近い敵に数歩で近づく／ナイフを逆手に／左足を着地点に突き刺し、それを軸とした回転の勢いに載せて喉頭へ。崩れ落ちる敵を素早く静かに地面に倒す／次の敵へ

戦闘終了後／キャンプ地に戻る。

「お疲れさん」

ねぎらいの声がかげられた／それに頭を下げて自分のキャンプへ戻る。

戦闘用の服から着替え／右手の珈琲に口をつける。

軽傷者僅か。

死傷者無し。

仲間がいなくならないのはいい事だ。

ため息をつく／右腕に巻いた包帯を解く。

軽傷者の一人は自分の事だ。少し失敗して反撃にあつた。かなり深く切りつけられ、服は二度と使えないくらいには損傷したのだが／これなら問題ないだろう／俺は自分の腕を見ながら呟いた。

既に完治している／銃創消失／以前より完治速度が数倍早くなっている。

既にこの力については把握済み／特に驚くことではない。

気付いたのは忍足あずみと会ってすぐ、流れ弾が腕を掠めた時／僅

かな傷でしかないそれは、三秒とかならずに再生した。傭兵達は驚いたが、だからと言って恐れるという事は無かった。俺がまだまだ未熟なただのガキだとわかっていたからだろう。むしろ好都合であるかのように俺を戦場へと連れて行った。

大佐にも実地訓練と称されて猛特訓を詰まされたが、この再生力がなければ沿うまではしてもらえなかっただろう。今は大きな武器であり長所。

何らかのナノマシンによるものであるとは判明したが、それが何であるのかは定かではない。

しかしそれが利用できるのならば利用すべきである。少なくとも傭兵としての訓練を受けた俺はそう思っていた。

|| ||

得体の知れない場所で目が覚めた。どれくらい長い間、眠っていたのか。長い夢を見ていた気がする。

「起きろ一号……いや、ジョン・ドウ。目を覚ませ」

目の前の人物に目を留める。強者。知らない人物。

記憶不明瞭。思い出す。戦場で果てる前に回収。九鬼財閥。

俺は死亡していなかったが、そういう事にされていた。身体を調査しようとしていたと思われる。

ナノマシン。人には過ぎた代物。こんなモノは無かったほうがどれだけ良かったか。



フラッシュバック／化物を見るような視線。

名無しの俺にふさわしい／あの人につけられた名前。

『J・D』／刻まれたプレートが横になっていた台に付いていた。

目の前の人物の目的／不明／しかし九鬼財閥から脱けるのは確實協力可能／目的一致と仮定／作戦を決定。  
女／たかはるかえ橘天衣を『味方』と設定する。

「似た物同士か」

「協力してもらうぞ。どうせお前も一人では逃げられまい」

「……いいだろう」

確かに一人では無理／橘の作戦に便乗する。

橘は試験場／俺はここ本部／同時刻に脱出を開始する。

「しかし、お前の能力……」

「なんだ？」

「いや、川神百代の瞬間回復に近いものがあるな」

川神百代／武道四天王の一人／橘天衣も元四天王。

瞬間回復とはその奥義？／回復能力であると予想する。  
しかし。

「そんな便利な物じゃないさ」

これは咎／罪／罰／少なくとも恵みではない。

瞬間回復がどのようなものかは知らない／しかし練り上げた物であるのは確か／暴走して身体が変質することも無い。

この未知なる技術は人間が手を出すべきモノではない。

ロストテクノロジー／オーバーテクノロジー／それは誰にも知れないが、俺が死ぬと共にこの世から抹消されるべき／それも信頼できる相手に死体を任せ、完全に抹消してくれる事を前提に。

「では、評価試験の日に」

「了解した。俺にも俺の、目的がある」

脱出の時は近い。

九鬼揚羽さえいなければ、脱出は容易い。

## プロローグ（後書き）

あとがき

アニメで色々あったからお蔵入りになったネタと複合して解放。  
本来は橋天衣に会うことなく、普通に反逆者みたいな感じで3話くらいで終わる話のはずでした。

第一話（前書き）

脱出。

## 第一話

「初めは無口だったが、最近は口数も多くなってきたな」

「ああ、いい傾向だ」

人に近づく／普通に／異端ではなくなる。

きつとそれはいい事なのだろう／普通の人間に近づくという事。

想像すらしたことが無かった／自分でも自覚していた／こんな化物が普通だなどと。

「じゃあな、元気でやれよ」

自分を拾った人物が去ってゆく／忍足あずみ。

元からそこまで殺しが好きではなかったのか／九鬼へ入ったと聞く。

一人一人／大佐もステイシーも見知った者は次々と／まるで今まで  
の日常がなかったことになるようで。

確かにそこにあっと思いい出／今はもう記憶の中にしか存在しない場  
所／戻ることは無いだろう。

「……時間か」

約束の日がきた／脱出を開始する。

コードネーム『J・D』／行動開始。

|| || ||

「馬鹿な！ 逃げ出しただと！」

『いえ、その』

「御託はいい！ さつさと捕まえる！ クビが飛ぶのはお前だけじゃないんだぞ！」

コンソールを思い切り殴りつけ、白衣の科学者は叫びを挙げる。通話相手は何か恐れ、かなり慌てている様子だった。

しかし彼にとってそんな事は知ったことじゃない。何せ、今までのキャリアやら研究成果やらの全てがかかっているのだ。今ここで逃がしてしまいその存在が公になってしまえば……そう思うだけでぞつとするような恐怖に襲われる。

「クソツ！ クソツ！ クソツ！ 何で今頃になって……っ！」

悪態を吐きながら、彼は部屋に設置されたモニターを凝視する。

既にそれらのモニターのうちいくつかには視認不能レベルでノイズが走っており、カメラの向こうを見ることは不可能になっている。しかしまだ無事に残っているカメラには、脱出した男の姿がしっかりと映っていた。

「クソヤロウ……っ！」

警備員は一秒も止めることはできずに薙ぎ倒され、ジョン・Dは迷うことなく科学者のいる部屋へと向かってきているのだ。何か目的があつての事としか思えない。そして科学者にはその目的に心当たりがあつたのだ。

「逃げないと……いや、逃げたところでこいつが生きてることを知られちまったら……」

ブツブツ言いながら悩む科学者だが、答えが浮かぶ様子は無かつた。そしてそうこうしているうちに、部屋の近くの廊下を移していたカメラが機能を停止した。

J・Dの姿が監視カメラから姿が消えるのを見届けた科学者は、急いで扉の反対側にある壁ぞいに逃げた。扉にはロックをかけたが、そんなものが通用するとも思えなかつたのだ。

それから数秒もしないうちに、扉から鋭い金属音が響いた。そして科学者が瞬きをするその一瞬で、頑丈なはずの扉が近くの壁ごとバラバラに切り裂かれていた。

「馬鹿な……」

科学者は驚愕に目を見開いた。

J・Dの両腕が、何か硬質な鈍色の刃物状のモノへと変化していたのだ。

そんな事、今まで長い間J・Dを研究してきた科学者は把握していなかつた。もつと別の所に注力していたせいなのか、それともいくら研究しても判らないような事だったのか。

どちらにせよ、それが今科学者の命を脅かしているのは間違いないだろう。

「やて……」

「く、くるなっ！　くるんじゃないっ！」

科学者は必死の形相で、近くにあったものを片っ端から投げまくる。無駄と知っていてもそうせずにはいらなかった。既に平時の精神など保っていないのだ。

しかし、J・Dはいつの間にか普通の腕へと戻した両腕を振るって投擲物を弾き飛ばしながら科学者へと近づいてくる。

その顔は全くの無表情、凝り固まっているそれからは何の感情も読み取ることができない。

逃げ場所の無い角まで追い詰められた科学者は来るな来るなと腕を振り回していたが、一瞬で両腕を壁へと磔にされてしまった。

「やめろやめろやめろやめろやめろ！　俺を殺しても何にもならないぞー！」

「……………」

痛みで混乱する科学者の叫びを無視し、J・Dは科学者の頭部を掴む。

そして、言った。

「お前の記憶の一部を、消去させてもらおう」

目的は、彼を研究してきた成果を残さないこと。

その意図は、科学者にも容易に予想できるものだった。その目的がどこにあるかまでは彼にはわからなかったが……科学者が思ったのは、その力を独り占めしたいのだらうというもの。

しかし本当の答えは、その力の被害者をJ・Dただ一人で終わらせ



ることだった。

「無駄だ！ 俺の記憶を消したところでお前の研究データは記録してある！ 無駄なんだよ！」

「問題はない。既にパソコン内のデータは消した」

「な………にい!?!」

頭を掴まれたまま、目線だけを動かした科学者は目撃した。

一部分だけ鈍色に変化したJ・Dが、彼のすぐ傍にあったPCに自分の指を『接続』させたのだ。

科学者が見ている間にも、嚴重なセキュリティが突破され、科学者が行ってきた成果が消え去っていく。

「馬鹿な。九鬼のセキュリティが」

「………残るは、お前の記憶だけだ」

「だ、だいたい！ パソコンのデータを消せても」

「お前の体内に侵入させたナノマシンにより脳内の電気信号及び血流を操作し、記憶を制御する。お前の記憶は俺の捕まった頃からのものを破壊させてもらう」

「ッ  
「！」

「安心しろ。廃人になったりはしない。元々人間の脳は忘れるようにできているんだ。薬物に制御はかなり昔からあるらしいが、それらよりはよほど安全だ」

その言葉を聴いた科学者は全てを諦めた。  
しかし同時に安堵もする。

記憶が消され、記録が消失するという事は、彼が責任を問われることもないのだろう。

少なくとも記憶が消された後の科学者には罪などないのだから。  
そう、瀕死のJ・Dが運び込まれた際に『本当に死んだ』という虚偽の報告をしていた事も。

本当は生きていたJ・Dの研究を続行し、その研究内容を上へと報告していない事も。

何かが入り込んで来る激痛を感じた彼は、そこで意識を失った。

|| || ||

全ての記録を破壊しつくしたJ・Dは、その部屋を後にした。  
急いでこの場を離れなければならない。

いくら彼でも、九鬼の従者部隊の上位陣なんかを複数単位で相手にすれば捕縛されてしまうだろう。  
捕まることだけは、なんとしてでも避けなければならないのだ。

「……よし」

数秒ほどパソコンの前に立ち、コンソールに手を当てて目を瞑っていたJ・Dは、一言だけ呟いて部屋を後にした。

今の彼の頭の中には、パソコンに入っていたこの建物の構造がインプットされている。

目指す場所を定めた彼は出口がある地上一階に向かうかと思っただが、全く逆の地下の方へと通路を進んでいく。

最下層にあったとある部屋の扉をこじ開けた彼は、そこにあった下水施設から脱出することに決めたらしい。地上にある裏口から脱出したたり最上階まで上ってから滑空するなどの手段よりは、よほどマシな脱出手段だといえるだろう。

途中にいくら鉄柵があっても彼には何の意味もないのだから、下流へ進むことも途中でいくらでも横道にそれることも可能だろう。

一先ず彼は下流方向へと進んでいく。

下水を通る整備用の通路には監視カメラがあつたが、その機能もハッキングによって止めている。彼が下水管に入ったという事は誰にもわからないだろう。

後はこのまま脱出終了後、橘天衣と計画していた合流地点に向かうだけだ。

「上手く脱出できそうだな」

そんな言葉を漏らす彼だが、おそらく間違いはないだろう。泳がせている可能性も無きにしも非ずではあるが、彼の身体に発信機のよなものはついていないのはナノマシンが保障するし、それ以外の方法で何かあるとするのならどうしようもない。どちらにしろこの場を去る彼には関係のないことだ。

もっと大切な、重要な懸案事項が彼には残っているのだ。

J・Dは、自分の身体が何の研究に使われているのかを、データの

抹消を行う際に情報として会得していた。

寿命を伸ばす、傷を再生する兵士、ナノマシンを使用した感覚の共有による連携強化、などなど。肉体を意図的に変化させることについては想定していなかったようだが、他に考えられるいくつもの事が研究されていた。

そうする事が悪いとは考えないが、J・Dにとってはとても意味のない事に感じられるのは確かだった。嫌な事、愚かな事と言ってもいいかもしれない。

九鬼によって收容されるまでの生活で、彼はそれを悟っていたのだ。

死に対して持つべきなのは恐怖ではなく覚悟。

しかしそう簡単に死ぬことできないJ・Dにとって、それを持つことができるというのは、むしろ人間らしくて素晴らしいことだ。

死があるからこそ、人は終わりに向かって進むことができる。

そこまでに成果を出そうと努力するからこそ、全力を持って挑むことができるのだ。

人間であり、生きようとするのなら、生き抜いた果てにある終着点である死は、避けてはならないものなのだ。

終わりよければ全てよし、という言葉になぞらえるわけではないが、終わりが無いのなら、それは、それまでの全てがまるで価値をなくしてしまうのではないか。

J・Dは、未だ人間らしくない心を持ちえているからこそ、そんな考えを持つに至った。

己が、真つ当な人間とは言い難いからこそ。

それでどれだけ苦しんだか。

親しい人間が己のいた部隊から消えていき、どれだけ一人で戦い続

けたか。

その部隊から去らなかつた彼にも責任はあつただろう。しかしどうしてそこを去ることができようか。

大切な家族がいた場所だからこそ。自分が始めて見つけた居場所だからこそ、彼はそこを去りたくはなかつたのだ。どうせ離れ離れになつて戦い続けるのなら、初めて見つけた自分の家とも言える場所で戦いたかつたのだ。

下水から抜け出て、ひとまず自分の身体を確認した彼は呟いた。

「身体を洗い流したほうがいいか」

自分の身体から漂う酷い匂いに、彼は不快そうに顔を歪ませた。

仮にも脱出という大きなことを成し遂げた後ではあるが、流石に女性相手にこれでは格好がつくまい。

その程度の気配りなんかは、子供時代に大佐に叩き込まれている」  
D だった。

## 第一話（後書き）

あとがき

F a t e / Z e r o 見てただけど最新話のソラウ酷過ぎワロタ。

おかげでランサーが三倍くらいかつこよく見える。

ウェイバーちゃん可愛いよウェイバーちゃん。おっと、ちゃんじゃないか。

マジコイでは流石に鬼畜展開が無いから安心して見れるのがいいわ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7880y/>

---

行き着く果てに見えるモノ

2011年11月28日07時47分発行